

防災千葉北部

NPO 法人日本防災士会 千葉県北部支部会報 平成 28年 1月 1日発行(第 23号)
事務局 〒272-0812 市川市若宮 2-27-8 090-4389-9380(飯岡方)

明海大学「第28回明海祭」に初参加

北部支部は浦安市明海に本部を置く明海大学の浦安キャンパス明海祭実行委員会からの要請を受け、今年で28回目となった「明海祭」に初参加しました。

同大学は創立45周年を迎え現在約4700名の学生を擁する私立の総合大学です。建学以来、地域市民とのつながりを大切にし地域に貢献出来る人材の育成を目指しています。

「明海祭」はこのような建学の精神のもと、同大学の学友会主催で毎年開催されています。2015年は開催テーマを「カラフル(多彩)」とし、地域を含めたより多くの多彩な人達の参加を目指した結果、在学生だけでなく学生の家族、同窓生、地域市民などが賑やかに集い合い互いのつながりを深め合う場となりました。

北部支部としては初めて経験する3日間に亘る長期の開催でしたが、北部支部会員の他、首都圏支部連絡協議会、BCNなど延べ60名近い方から献身的な協力を得て無事故で成功裏に終わることが出来ました。

参加内容は以下の通りです。

1. 日時：10月30日(金)～11月1日(日) 11:00～15:00(3日間)
2. 場所：浦安市明海 明海大学浦安キャンパス
3. 参加内容：

- ・地震体験(起震車)
- ・応急手当体験(心肺蘇生、AED)
- ・緊急脱出についての啓発(ロープワーク)
- ・家具転倒防止についての啓発(各種用具展示)
- ・備蓄品についての啓発(水、食料、トイレ、生活用品など)
- ・その他(テント張り、新聞紙スリッパ作成)





幸い全期間好天に恵まれ地震体験車もフルに動かすことが出来、総計518名の搭乗者を迎えて大盛況でした。大学祭らしくコスプレの若者達の乗車もあり盛り上がりました。

ロープワーク、展示、心肺蘇生、AEDなどのコーナーも着実に来場者があり、実のある対話と啓蒙が出来ました。新聞紙を利用したスリッパ作りも好評でした。加えて今回は参加会員同士の交流を通し、スキルアップと絆を結ぶ良い機会となりました。地域住民からの出展があまり無

い中であって、防災士会の整然とした大規模な参加は明海祭の歴史の中でトピックに値するものになったのではないかと推量されます。

終了後、明海祭実行委員会から次のメッセージが寄せられました。

明海大学 明海祭実行委員会からのメッセージ

明海祭実行委員長 望月彩加

今年で28回目を迎えた明海祭はテーマを「Colorful」とし、様々な世代を対象に地域との繋がりをより深めようという意味を込め「津波防災週間」に開催されました。その中で、毎年学園祭でお世話になるヒロ企画さんからの紹介で防災士会の皆様のことを教えていただきました。東日本大震災が起きてから世間が防災への意識を高めており、また多くの世代が訪れる学園祭において「防災」という切り口で地域の方と大学を結べるのではと思いをおかけしました。

当日は心肺蘇生やAED術、ロープワーク術の正しい知識を知り、地震体験車では震度7を体験し、立てずにただ揺れに耐えるしかない恐怖感など実際に体験してみないとわからないことばかりで、災害や緊急事態が起きた時に準備をしておかないと本当に何もできないという危機感を教えてもらいました。小さなお子様からお年寄りまで多くの方が防災について深く学べた価値ある試みでした。

明海祭で学生のみならず、防災をテーマに浦安地域の幅広い世代に呼びかけること、防災について体験していただく機会を提供することができたのも防災士会の皆様のご尽力のおかげです。心より御礼を申し上げます。ご協力ありがとうございました。

防災士側参加者の感想と意見を集約すると大要以下のとおりです。

- ・大変意義のある貴重な体験であった。「気づき」「得るもの」が多かった。
- ・複数の支部がこのように連携、協力出来たことは大変良かった。
- ・地震体験車を中心に出来るだけまとまって活動するのが効果的。

個別事項で貴重な提案もありました。

- ・ロープワークは色々な救難場面を設定し（目的を明示）行うと更に効果的と思う。
例：「高所作業時の自身の安全確保」「高所から人や物を降ろす」「高所からの脱出」「ロープ
どうしを確実に繋ぐ」等
- ・主催者側で救護所を設けていない場合、防災士会で救急救護所を開設して対応してはどうか？（実際の貢献とスキルアップ）

2015年は、放送大学、明海大学と二つの大学祭に参加し、防災啓蒙活動をより広く、不特定多数の地域社会の皆さんに広げることが出来たのは大変意義のある事でした。

「命を守る対話がにぎやかに」

1000年後の命を守るための対話集会 in 船橋市立湊中学校

青木信夫、茂木宏

2011年3月11日、東北沿岸を襲った大津波で多くの人達が亡くなり、多くの人達がかけがえのない家族や友人、知人を失った。宮城県女川町でも800名以上の犠牲者が出た。その深い悲しみの中にいた小学校6年生（当時）の生徒達から物語は始まる。

震災後に迎えた女川町立女川中学校の入学式。悲しみの中「おめでとう！」の言葉は無かった。社会科の授業（阿部一彦教諭担当）で生徒達は悲しみに正面から向き合い、「1000年後の人達に二度とこんな悲しい思いをさせたくない」と話し合い「津波の被害を最小限にする三つの対策」を考えた。

「記録に残す」、「避難路を作る」の二つはすぐに決まったが三つ目が決まらない。

その時一人の生徒が言った。「おじいちゃんは“逃げろ！”と言っても逃げない人達を助けるために3度も引き返し、3度目に帰らなかった。みんなにもっと深い絆と信頼があればおじいちゃんは死なずに済んだと思う」と。生徒達は涙を流し合い「絆を深める」という三つ目の対策が決まった。

1. 「絆を深める」
2. 「記録に残す」
3. 「避難路を作る」

この三つの対策は、生徒達を中心に保護者、地域住民が一体となって進めてゆくことになった。

生徒達の具体的活動が始まった。

「記録に残す」と「避難路を作る」活動は「いのちの石碑」づくり運動としてスタート。町の21カ所の浜の津波到達地点より高い所に石碑を建て、警告と避難の目印として1000年後まで残す活動である。生徒達は100円募金をしながらたとえ20歳までかかってもやり遂げる決意であった。子供達の真剣な心に大人達も即座に応じ、半年余りで目標の1000万円が集まる。2013年11月に最初の1基が女川中学校に建ち、以後平成27年11月までに9基が完成した。



石碑と生徒達



2014年11月現在の女川町

2014年春、高校に進学した生徒達は「1000年後の命を守る会」として活動を続け、「いのちの教科書（津波編）」づくり活動を継続してゆく。発端は中学でのある日の社会科授業でのひとりの生徒の発言。「今、自分達が方程式が解けるのは小学校で足し算、掛け算を学んで来たからだ。自分の命を守る方法を小学校1年から順に学んでゆくための命の教科書を作ろう」と。現在までに50回近くの勉強会を持ち「いのちの教科書」作りを進めている。生徒達はこの教科書を日本の子供達と、自然災害の頻発に苦しむアジアの国々の子供達に届けたいと考えている。こうした活動の中、2012年の世界防災閣僚会議では被災地の代表として100カ国の代表に津波対策を発表し、生徒達の真っ直ぐな心が大人達に大きな感銘を与えた。

今回の船橋市立湊中学校での対話集会は、公益財団法人社会貢献支援財団による平成27年度の社会貢献者表彰の授賞が決定し、授賞のために代表が上京する機会に千葉の中学生と対話と友情を結ぶ機会を持ちたい、という生徒達の願いによって実現した。その仲立ちを務めたのが防災士会千葉県北部支部所属の青木防災士。きっかけは2013年以降青木防災士を中心とした有志で、幾度も東北の被災地を訪ね女川中学校の卒業生達と交流し絆を結んだことにある。

対話集会は日本防災士会首都圏支部連絡協議会主催、日本防災士会千葉県北部支部とBCN共催、船橋市教育委員会後援で2015年11月28日、船橋市立湊中学校（船橋市日の出）に女川中学校の卒業生代表12名と阿部一彦教諭他を迎えて開催された。迎えたのは湊中学校の全校生徒達と船橋市、浦安市の中学校4校の生徒代表と保護者達。合計約500名の対話集会となった。

湊中学校吹奏楽部がちからいっぱい演奏する「あまちゃん」のメロデーに乗って盛大な拍手の中、女川中学校卒業生と阿部教諭達が入場し対話集会の第一部がスタート。湊中学校の太田校長の挨拶の後、湊中学校生徒有志が歓迎の郷土芸能「バカ面踊り」を賑やかに披露。バカ面踊りの滑稽なお面と仕草に女川の生徒達も笑い転げ、阿部教諭と男子生徒が見事な手振り足さばきで踊りの輪に加わるサプライズもあり皆の心がひとつになって雰囲気は最高潮に。

そして前女川中学校教諭の阿部先生による概要説明の後、生徒代表12名が「1000年後の命を守る」活動について見事なリレープレゼンテーションを行い、生徒達が話し合っただけで決めた三つの対策とその対策に基づいて実行して来た活動（前述）を紹介。そして最後に「私達は悲しみを足か



せにするのではなく、これからの生き方の指標にして行きたい。前向きに生きて行きたい。私達は今、そうした生き方が出来ていると思います」と結ぶと、共感と感動の拍手が鳴りやまなかった。

感動的なプレゼンテーションへの御礼にと湊中学校吹奏楽部による演奏が行われた。曲目は吹奏楽部の生徒達が選んだ「花は咲く」と「嵐のガッツ」。忙しい行事の中、この日のために猛練習を重ねて来た力強い演奏に涙を浮かべる女川の生徒達がいた。湊中学校の校歌をマーチ風にアレンジした躍動感溢れる演奏の中、女川の生徒達が中央突破で晴れやかに退場し第一部を終了。

続く第二部では生徒達によるグループディスカッションと保護者達の交流会が別々に行われた。生徒達のディスカッションは女川中学校卒業生12名と湊中学校をはじめとする地元中学校の代表、約50名が6つのグループに分かれて1時間超にわたり行われた。各グループに女川中学校卒業生の男女高校生が入り、「命とは?」「命の尊さを一番感じたのはどういう時?」「命を守るためにあなたに出来ることは何?」などのテーマを中心に対話をリード。女川の生徒達からは様々な思いが語られた。例えば次のような言葉に耳を傾ける中学生達の真剣なまなざしが印象的であった。

＊「自分達の活動は1000年後の命を守るためのもの。そのために、大切な石碑を絶対に動かさないでくださいという事、逃げない人がいたら無理にでも引っ張って一緒に逃げてください、という事を石碑で伝えて行きたい」

＊「中学生は大人に近い体力もあるのでお年寄りを助けることが出来る。普段から自分達も人を助けることが出来るのだと思うべきだ」

＊「自分達が色々な活動が出来たのは、中学生であったので周りの大人達が助け、応援してくれたからであると思う。だから中学生の君達が大きな力を持っている」



- * 「君達が声を上げて先生を動かし、中味の濃い防災訓練をやって欲しい」
- * 「いじめは命の尊さがよくわからないからだと思う。命の大切さを知ることはいじめも無くなる。そして自分達の子供にもそれを伝えて行ける」
- * 「いじめられている子供を守りたい。一緒にいてあげるだけで守ってあげられる」

中学生達からは；「これまで命のことは余り考えていなかった。今回改めて考える良い機会になった」「一日一日を大事にすることが命を大切にすることだと思う」などの感想が聞かれた。

また女川の生徒達からは；「命の大切さをわかってもらえた」「液状化被害の話が聞けて勉強になった」「千葉の中学生達が命の大切さについて考える時、いじめの問題を真剣に考えているのが印象的だった」等の声があった。

初めて出会った若者達は最初は恥ずかしそうで互いに遠慮勝ちであったが、「今好きな人はいる？」「好きな人と交際している人は？」等、高校生達の巧みな質問で緊張がほぐれ、きらきらした瞳と笑顔が輝き出し、明るい笑いがそこかしこで弾けて行く様に、見守る大人達が魅了され感動と勇気を貰ったグループディスカッションであった。若者達が結んだ絆が大きく育ってゆくことを願わずにはおられない。



再建された女川駅

京成サンコーポ浦安自治会 防災訓練を実施

京成サンコーポ浦安は京葉線新浦安駅より徒歩約10分の距離にある総戸数410（全16棟）の5階建RC造マンションで、独立した自治会組織を持っています。全体的に居住者の高齢化が進んでいますが若い世代の入居も少しずつあります。

4年前の東日本大震災に際して自治会があまり機能出来なかった反省を踏まえて同年、自治会の中に防災プロジェクトが作られました。自治会役員は全員が年次交代ですが、防災は継続性と一貫性が大切であるとの観点から任期を3年とし、かつ再任を妨げないことにして運営されています。防災マニュアル（自助編と共助編）を自主作成し活用。又、防災には助け合う“人の輪”が力を発揮するとの教訓を踏まえて、本プロジェクトは防災だけでなく自治会の夏祭りの企画運営にも携わり、居住者の“人の輪”作りに努めています。尚、本プロジェクト発足以来の中心メンバーの一人として日本防災士会千葉県北部支部所属の梅木防災士が活躍しています。

今回の防災訓練はプロジェクトとして第七回目。これまでは消防署などの行政機関に依頼して実施



してきましたが、今回は自治会で「震度6～7クラスの地震に対する防災対策」との訓練テーマを掲げ、日本防災士会千葉県北部支部に協力を要請しました。それを受けた北部支部が、BCN、首都圏支部連絡協議会（多摩ブロック他）と共に以下の講習を準備し、2015年11月28日（土）9時～12時20分を実施しました。

- ・地震体験車による震度6～7の疑似体験
- ・心肺蘇生講習（心臓マッサージとAED）
- ・応急処置講習（バンダナ、パンスト、新聞紙、レジ袋を活用）
- ・家具転倒防止方法、備蓄品の講習

まず、上記講習前の9時から首都直下型地震発生の想定で各棟にトランシーバを配置しての住民の安否確認訓練が行われました。

講習は安否確認を終えた住民が訓練本部前に集合し午前10時に開始されました。今回は班体制によるグループ講習が採用されました。全16棟を3班に分けて班長を決め、上記4つの講習を各班が30分間隔でローテーションし、約100名の住民が参加しました。このグループ行動も防災訓練の大切な一環として企画されました。班単位のローテーションにより教える側も教わる側も切れ目なく効率的な講習が出来、密度の濃い充実した内容の約2時間の講習となりました。参加者の多くがメモ帳やノートを手手に熱心に受講し「30分は少し短い、40～45分位欲しい」との声も聞かれました。今後同様の訓練を行う場合に参考となる訓練運営方式のひとつであると考えられます。

参加者からは以下のような声が聞かれました。

- * 「震度7クラスになると固定していない家具が必ず倒れること、飛んで来た家具で怪我をする危険が大きいことがわかった、家具の固定を改めてしっかりやりたい」（地震体験車、家具転倒防止講習）
- * 「心肺蘇生とAEDのそれぞれの目的と、救急車到着までそれを続けることの意味と大切さがわかった」（心肺蘇生、AED講習）



* 「ふだん気づかないような身の回り品で応急に対応出来ることがわかり良かった」
(応急手当講習)

防災プロジェクトの栗林リーダーは「今回はコンパクトにまとめてみました。具体的な企画は防災士の梅木プロジェクト員にお願いしました。内容は良かったと思います。もう少し時間が取れば更に良かったと思います」と語り、自治会長の金澤氏も「3.11 で自治会が十分機能出来なかった反省が少しずつ実っていると思います」と笑顔で語られる姿が印象的でした。



日本防災士会首都圏支部連絡協議会が発足し北部支部も加盟！

日本防災士会首都圏支部連絡協議会（以下、「首都圏支部連絡協議会」）が発足しました。これは東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県の一都三県に設立されている防災士会支部の連合組織で、日本防災士会本部からの要請と支援を受けて平成27年9月に設立されました。現在11の支部と1つのブロックが加盟しており、千葉県北部支部も発足メンバーとなりました。

首都圏支部連絡協議会の目的は「それぞれの支部が持つ、知識や技術を伝え合い、人材育成と保有している様々な資器材を有効に活用することで、支部活動を活発にし、日本防災士会の活動を広域的に広め、かつ、地域の防災力向上に寄与すること。また、支部活動支援の広がりとともに「絆」とコミュニケーションの強化を図り、首都圏のあるべき防災体制を整えること」としています。北部支部では首都圏支部連絡協議会の一員として9月以降、以下の行事における防災イベントを成功裏に主催および共催することができました。

- * 10月10日（土）・11日（日）放送大学千葉学習センター「秋祭り」（千葉市美浜区）
- * 10月30日（金）～11月1日（日）明海大学「明海祭」（浦安市）
- * 11月28日（土）「1000年後の命を守るための対話集会 in 船橋市立湊中学校」（船橋市）

いずれも、一支部だけでは対応することができない規模の大型防災イベントでしたが、首都圏支部連絡協議会に加盟したことで優れた人員の確保、資器材の準備が容易になり活発な活動が出来ました。更に参加した北部支部会員のスキルアップが出来たこと、相互のコミュニケーションと絆を強く出来たことなど、大変に意義のある活動が展開出来ました。



今後も首都圏支部連絡協議会の一員として地域防災のために幅広く活動して行きたいと思います。そしてより多くの皆さんに参加いただき、防災活動の有意義な楽しさをぜひ体験していただきたいと思っています。



「災害に備えるマンホールトイレ・シンポジウム」より

平成27年11月19日に国土交通省主催で首記のシンポジウムが都内の日本科学未来館で開催されました。11月19日は国連が定めた「世界トイレの日」です。世界には衛生的なトイレが得られない人達が約25億人おり、そうした不衛生な生活環境が原因で毎年多くの子供達が命を落しています。また阪神・淡路大震災、東日本大震災などでも示されたように大規模広域災害におけるトイレ問題は深刻です。

今回のシンポジウムから得られた情報を以下にご報告します。

1. 「水の備蓄、食料の備蓄」に比較してトイレ問題はそれほど取り上げられて来ませんでした。しかし食べれば必ず排泄が有り、排泄しなければ健康は維持出来ません。食事は多少抜くことが出来てもトイレは我慢出来ません。阪神・淡路大震災では被災後3時間で55%の人がトイレに行きたくなかったというデータがあります。トイレはライフラインを維持する為の重要な要素です。
2. 「汚い、臭い、不便、怖い、安心して入れない」というトイレ環境では「飲み水を控える、食べ物を控える」となり、脱水症状、体力や抵抗力の低下、慢性疾患の悪化やインフルエンザなどの感染性疾患を引き起こし、命の危険にさらされます。避難所全体の環境悪化にも直結します。
3. このように重要なトイレですが、東日本大震災では仮設トイレが全ての避難所にゆき渡るのに65日間を要しました。(仮設トイレ設置率は3日で34%、1週間で51%、2週間で79%……65日で100%) 遅れた主な原因は各所の工事現場に散在している仮設トイレを迅速に集積するのが困難であったこと、寸断された道路が輸送を妨げたことなどです。更に使用開始してからも仮設トイレの糞尿くみ取りに必要なバキューム車の不足や糞尿処理場の被災などの問題がありました。
4. シンポジウムの中で宮城県東松島市におけるマンホールトイレの活用例が注目されました。マンホールトイレとは広域災害時の非常用として設計されたもので既存の下水道と直結した形で避難所などに設置されます。平成21年に国土交通省が創設した下水道総合地震対策事業によりその設置が国の助成の対象となりました。

東松島市では平成16年の新潟中越地震などでの教訓からトイレの重要性に着目し、平成19年からマンホールトイレ設置の予算化を進め、前記の助成を活用して東日本大震災発生時までに5カ所の避難所で設置を完了させていました。

5. このマンホールトイレは東松島市の避難所において、震災発生直後からフルに活用され仮設トイレの不足を補い大変高く評価されました。
6. マンホールトイレには次の利点があります。
 - イ) 災害時に迅速に組立てて使用出来る。(ただし組立と運用法の習得が必要)
 - ロ) 糞尿を既存の下水道管に直接排出するため悪臭が無く、くみ取りも不要。
 既存の下水道は東日本大震災でも上水道に比較して破損率が低いことが示されており、マンホールトイレが高い確率で使用出来る。
 - ハ) 専用貯水槽又は既存のプール、溜め池などの水を利用するので水道に依存せず自己完結型で運用出来る。
 - ニ) 地面と同じ高さにトイレが設置されるので高齢者などが楽に利用出来る。

尚、マンホールトイレは屋外にテント張りで使用するため冬期間における防寒対策が課題です。

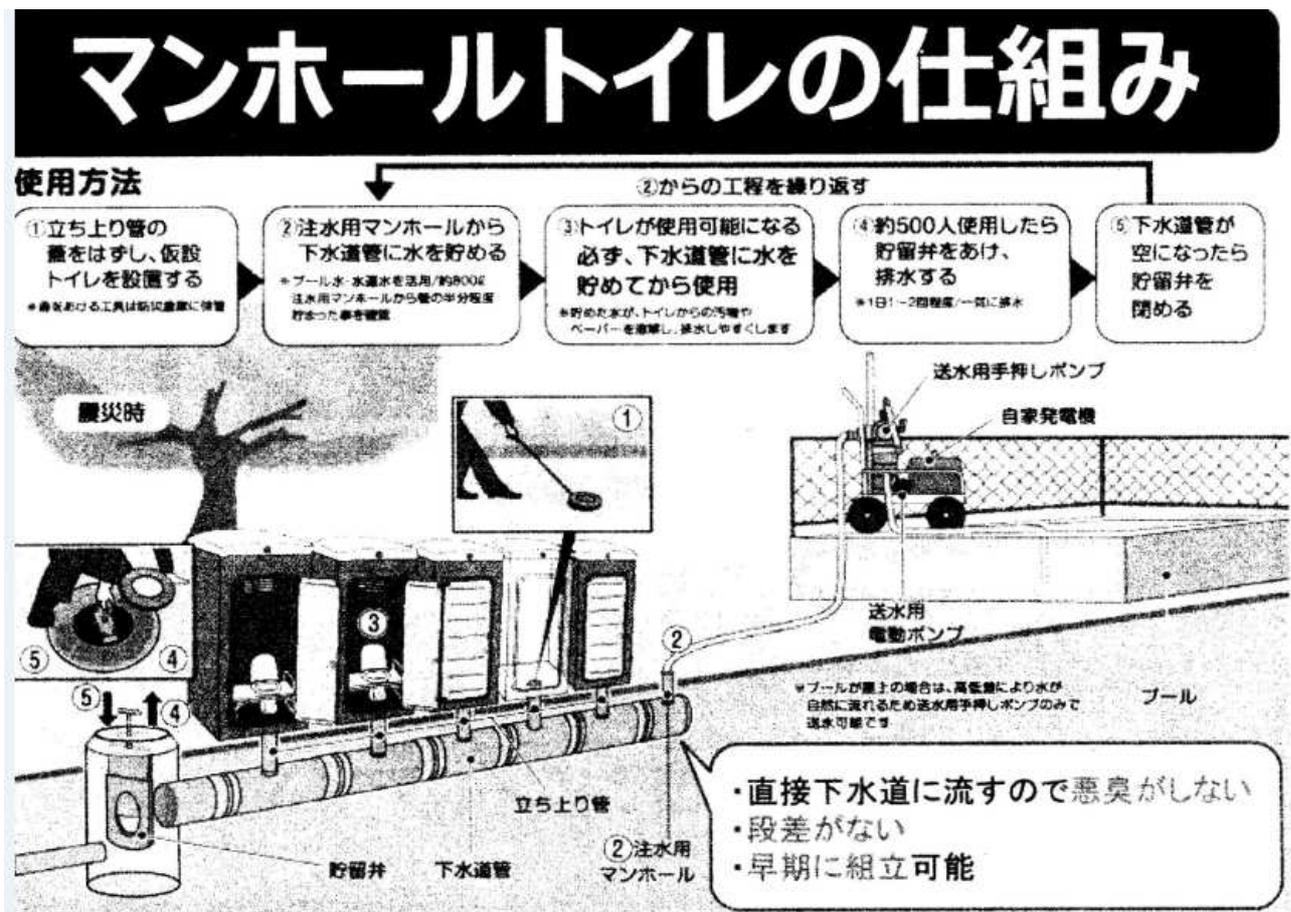


図1: マンホールトイレの仕組み

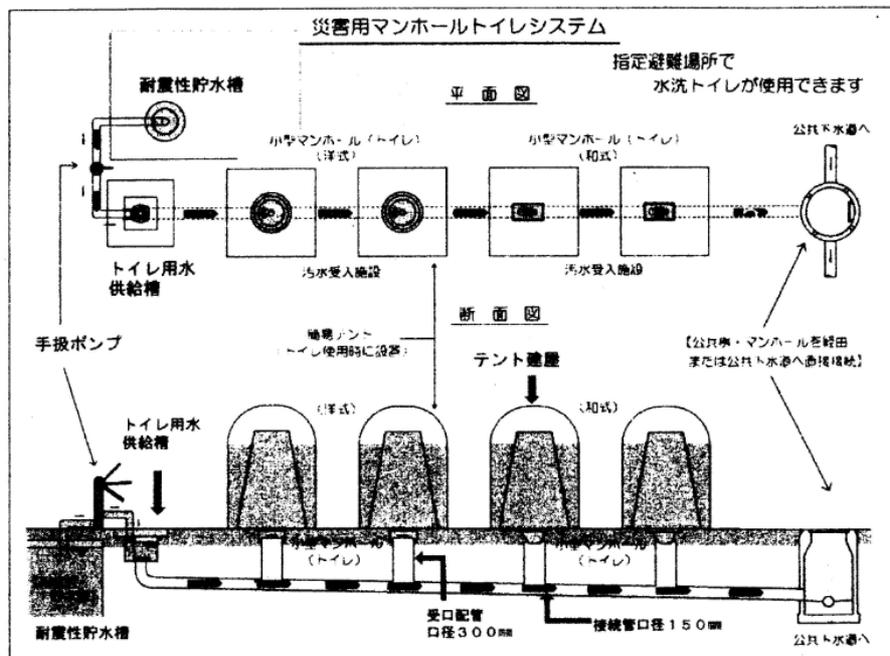


図2: 災害用マンホールトイレシステム

7. 避難所におけるトイレの、切れ目の無い導入手順として以下が推奨されます。
 携帯・簡易トイレ（初動対応）→マンホールトイレ→マンホールトイレ+仮設トイレ
 防災基本計画では住民における「最低3日間、推奨1週間分の携帯トイレ・簡易トイレの備蓄」と指定避難所におけるマンホールトイレの設置努力を求めています。
8. 全国のマンホールトイレの設置数は2014年末の時点で2万基で人口7000人に1基の状態です。推奨は避難住民50～100人当たり1基ですからこれから各自治体が計画的に設置を推進してゆく必要があります。防災士として地域よりその必要性の啓蒙と発信に努めて行くことが望まれます。

本シンポジウムには飯岡防災士と中村利孝防災士が参加しました。

+++++
編集後記

広報誌は活動の正確な記録であると同時に、意味のある情報や知識を正しくお伝え出来なければならないと考えています。そして又「防災」という言葉から受ける何となく非生産的な印象を、積極的な希望のイメージに変えてゆく広報誌でもありたいと考えています。今回、女川と千葉の若者達の対話集会取材を通じて、未来への大きな希望とその実現への強い意志をもって防災を語る若者達に出会いました。彼らを変えたものは痛切な津波体験を通じて得た命への実感であったように思います。これからもこうした感動を折に触れてお伝え出来れば幸いです。

次号から会員同士が絆を結び深める一助となるような新企画も始めたいと考えています。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

広報担当： 黒田哲司 藤下 進 青山久子 茂木 宏